

昭和20年夏の頃

私は、この頃、幼年より少年になったと思います。昭和19年、日本は戦争の末期を迎えようとしていました。私達、国民学校生に対し、児童疎開令が発せられ、私は6月に縁故疎開で八尾の祖母の妹宅に預けられました。夏休みをきっかけに大阪市内に帰りました。9月より元の清塚国民学校に通いましたが学友達は集団疎開で奈良県吉野へ行っていて縁故のない子、集団疎開に参加できなかった子（障害者、病弱者、お金が出せない）が周辺校から集められて勉強をしていた。先生達も新しい人だった。第2次の集団疎開募集があり私はそれに参加しました。戦局は日々陰しく、吉野の上空を何百機のB-29が各地攻撃の後通過して行きました。毎日B-29の数を数えるのが日課になっていました。私の家も6月中頃に焼夷弾で焼け出されました。父親は千島列島へ、祖母、母、妹2人は八尾の垣内で暮らし始めていたが、もうあかん、死ぬ時は家族一緒に死のうと私は吉野から親の元に帰りました。7月の八尾は一年前とは大きく変わっていました。毎日が警戒・空襲警報の連続でした。艦載機が小編隊で飛来してくるようになりました。私の住居の近くに飛行機の格納庫が建設中だったので、これをめがけてグラマン・ロッキード戦闘機がやって来て中空からの偵察だったが、だんだんと低空飛行で機銃掃射をするようになってきました。これは本当に恐怖のどん底でした。日々の生活は大変でした。朝は、一応登校するも警報がなるとすぐに急いで帰宅する。東高野街道は一本道なので危ない、山裾の農道を帰ることにしていました。私はその時に出来上がりつつある格納庫の上で働いている人々を初めて見ました。ふんどし一丁の裸でモッコを担ぎ、シャベルで木を植えていました。盛夏の中、定着するはずはありません。ある日、完成祝いということで、作業は休み、食料が支給されたと聞きました。子供達の間では情報交換が盛んでした。なにせ軍国少年団です。偵察隊を作って、その都度話し合いをしていました。親から聞いた話や自分達が見てきた事を話し合いました。小さな溝、一つ向こうが基地なのですから何かにつけてうろろしました。番兵には注意をされたと思いますが、子供は冒険したいものです。私は中学生ともお付き合いがあったので、動員で働きに行き帰りの話も聞かせてもらいました。（次号に続く）

中島一郎

昭和20年夏の頃

ある日、格納庫に飛行機が入ったと知った。あの大きな飛行機をどうして運んできたのだろうと考えた。大正飛行場（現八尾飛行場）より夜に人力によって引っ張ってきたようだ。負戦後知ったが、飛行場より一直線の誘導路が格納庫迄つけられていた。

それも束の間、艦載機の波状攻撃があり私達家族も防空壕に入ったり、出たり、ここは危ないからと場所を変えたりで大変だった。村の半鐘が打ち鳴らされ火災も発生していた。当時の村の家々の屋根は、わらぶきだったので被弾するとすぐ火がついた。人々は攻撃の合間に協力して消火に努め大きな被害にはならなかった。格納庫の中の飛行機はどうなったのだろうかと子供達は心配になり、その夜、偵察隊として私も格納庫に忍び込んだ。私は初めて双発の機体を見た。相当な被弾があったと思うが、ガソリンが入っていなかったのだから火災にならなかったのだろう。数日後、格納庫の中は空っぽになっていたようだ。学校の帰り道、山側より見たあの格納庫を作っていた人々の事が子供心に引っかかり、どうしても彼らのいる場所が見たく思っていた。級友の家の前より飯場が見えるので見に行った。夕方、一日の労働を終えた彼等は一列になり両手を頭の後ろで結んで号令をかけながら帰ってきた。真夏の炎天下、働かされてきた彼等はフンドシー一枚、ハダシだった。彼等は針金でつながれていたのだ。彼等を追い立てているのは少年のような日本人だった。割木を振り下ろしながら労働者を追い立て、その外側には小銃を構えた兵士が監視していた。私は、大変なショックを受け、母親に見てきた事を話したら二度とそこへ行ってはいけない。人にも言うな！と固く止められた。

8月に入って広島、長崎に特殊爆弾が落とされ連日の空襲で各地が戦災し、人々は疲れ果てていた。13日夜、偵察隊は朝鮮人達が「もう戦争は終わる」と言っているとの情報を伝えてきた。後で知る「ポツダム宣言」受託の事だ。14日は朝から静かだった。やはり戦争はもう終わるのかとも思っていたが夜になると大変だった。最後の大阪大空襲だ。照明弾が何個も落とされ、焼夷弾、爆弾、高射砲の音が限りなく続いた。翌、15日は母の妹の家に、もう会えなくなるかもしれないので最後のお別れに行くことになる、奈良で正午のラジオの重大放送と一緒に聞いたが初めての天皇の声、母親達も何を言っているか、さっぱり判らないと言っていた。18日頃だったと思うが、朝鮮の人達が戦勝記念宴会を開くそうだと聞いた。農家より牛を一頭買って来て、その肉を肴に酒宴を開いた。一日で終わらずに2～3日続いた様だ。村の人々に近づかないように注意が出され兵隊により厳重に警戒されたと聞く。20日過ぎになると飯場の人々は、それぞれ国へと帰っていたようだ。2棟程の飯場が残され、そこで数家族が、数年住んでいた。村の大人達は密造の「どぶろく」を子供達は「イモアメ」を分けてもらいに行ったりして交流した。結婚式も派手に行なわれ、初めて見る彼等の本来の姿を見た。これが私、10才の時の8月だ。戦後の始まりだ。

中島一郎

(3月号訂正・・・清塚国民学校→清堀国民学校)